

## 遍路の意味空間と体験過程

福島明子\*

### Meanings of Space and the Process of Experiences in the Shikoku-henro Pilgrimage

FUKUSHIMA Meiko

#### abstract

The structure and meanings of space in Shikoku-henro, a pilgrimage in Shikoku, and the process of experiences undergone by 11 henrosha or pilgrims were analyzed in this study. The external structures of Shikoku-henro include the island and nature, 88 temples, traditional costumes and properties, and internal structures include the hallowed ground, faith of Kohboh-Daishi, receptions by residents in Shikoku, traditional manners and rules, as well as the interplay between everyday lives and holy ones. In these structures, Shikoku-henro means receptive space, the space of self-disciplines, the free and protected space, and the space that keeps and strengthens relationships with others including other henrosha, residents, nature, and Daishi, among others. In these meanings of the space, henrosha has seven stages in the process of experiences: that of (1) introduction and preparations, (2) uneasiness, trial and error, (3) complication and crisis, (4) self-exploration and stability, (6) integration, and (7) transition.

Keywords : Shikoku-henro pilgrimage, walking, meanings of space, process of experiences

#### 問題と目的

遍路は八十八ヶ寺の寺院からなる四国の霊場である。佐藤（1990）は、遍路を含めた巡礼に関する書籍を下記（1）～（3）に分けている。筆者による補足（4）も交えながら巡礼に関連する書物を整理すると以下のようなになる。（1）宗教学、仏教学、民俗学、歴史学の立場から寺院、寺宝の縁起、由来などについて述べられたもの。（2）道案内やガイドブック。（3）社会学の立場から、歴史的資料や社会調査にもとづく量的データにより巡礼者の量的動向、属性や動機などの実態把握を行ったもの。（4）遍路経験者による見聞記。佐藤も指摘しているように、（1）（2）は各時代の習俗、歴史を知るための、（3）は各時代の全体像を把握するための貴重な資料となりうる。

このように、（4）を除き個人という視点は含まれていない。筆者は、地域に受け継がれる伝統文化には、地域にとっての意義のみならず、個人を惹きつける魅力があるのではないかと考え、伝統文化の意義を心理学的観点から見直す研究を行っている（たとえば福島、2003）。遍路に関していえば、観光バス、自家用車、電車やバス、バイク、自転車などの乗り物を使用して遍路をまわる人たちに混じって、徒歩による遍路者が増加しているといわれる。交通機関の発達した現代にあって、あえて時間的・経済的・体力的にコストのかかる徒歩での順拝を選ぶ人が絶えることがないのは、個人を惹きつける何らかの魅力、効果があるからではないだろうか。こうした心

---

キーワード：遍路、歩き、意味空間、体験過程

\*平成10年度生 人間発達科学専攻

理的意義の検討には、(3)のような質問紙調査による量的データだけでなく、個人に焦点づけた質的データによる検討が不可欠である。しかし前述のように個人に焦点づけた遍路研究はほとんどなされていないといえる。

人はなぜ遍路を歩くのか。遍路は個人にどのような心理学的意義をもたらすのか——。筆者はこの研究設問をもとに、歩き遍路に対する参与観察やインタビューを行ってきた。そして、遍路を歩くことによる心理的・社会的・身体的効果を明らかにし、併せてその背景要因の考察を行った(福島, 2004)。

1. 健康心理学的効果: ①身体面/体力増進、体調向上、体重の減少、身体感覚の変化 ②心理面/感謝とお返し、自己を見つめ直す、感動、信仰心、物欲の減少、霊的体験 ③社会面/属性や地域を超えた交流、他者の存在と自分らしさの追求、気持ちの区切り
2. 背景要因: ①大師信仰、②お接待、③遍路仲間との共通の体験・目標、④歩いて巡ること、⑤護られたなかでの自由、⑥装束と荷物、⑦自然、⑧シンプルな生活、⑨日常と非日常が交錯する世界

1の効果はどのようなプロセスを経てもたらされるのであろうか。また、1の効果と2の背景要因にはどのような関連があるのであろうか。本稿では、インタビューや参与観察によって得られた歩き遍路の事例を交えながら、背景要因を遍路の構造と意味空間に区別して検討し直すとともに、そうした遍路の構造・意味空間において遍路者が体験する体験過程について検討を行った。

## 方法

### 調査の時期と手続き

2001～2002年に筆者自身1ヵ月半かけて遍路を歩きながら、および愛媛県内子町において歩きの遍路者に対して接待を行いながら参与観察やインタビューを行い、2002～2004年に1～3年後のフォローアップを行った。さらに2004年に徳島県の一番札所近くで遍路者に接待を行いながら参与観察を行い、遍路後にインタビューを行った。

### インフォーマント

遍路での体験は個別性が高く、ある程度の事例数が必要である。一方で、各インフォーマントについて概略のみ記述したのでは、しばしば「歩いた人にしかわからない」と表現される通常1～2ヵ月に及ぶ遍路体験の特異性を記述するには十分とは言い難い。そこで本研究では、年代も職業も異なる11名の歩き遍路の事例を取り上げてその個別性を、またそのうち2名についてはある程度詳細に記述しその特異性を浮き彫りにしたい。特に2名を選んだのは2つの理由による。1つは、筆者が遍路を歩いたとき同行として遍路で共に過ごした(参与観察を行った)うえ、遍路直後に自宅を訪ねるなど複数回インタビューを実施し、十分な質的データを有しているからである。もうひとつの理由は、片や旅人として遍路の知識をもたず歩き始めた20歳代の男性、片や僧侶として修行のために歩いた40歳代の男性と、年代、立場、動機において好対照をなす2人だからである。

## 結果と考察

### 1. 事例

表1は11名の遍路体験の概略である。年代は20代から60代に及んでいたが、定職に就いているのは2名(事例5と事例7)のみであるが、これは遍路を結願(八十八ヶ所の寺院すべてを参拝し終えること)するのに長期間を要することが関係している。遍路に出た動機やきっかけは、旅をしたい、乗り物でまわったことがあり今度は徒歩でまわりたい、僧侶としての修行、仕事のストレス解消、健康増進、早期退職、定年退職などさまざまであった。その他、筆者が行った他の調査では亡くなった方の供養、自分探しなどの動機もみられた。信仰心から、あるいはライフイベント(人生上の出来事)がきっかけで遍路に出ると考えられがちであるが、必ずしもそうではないといえる。遍路者があげた遍路での印象的な体験、生起された感情も、人との出会い、人の優しさ、感謝の念、受けた親切へのお返し、自分を見つめ直す、視野の広がり、自信、努力することの大切さ、自然の偉大さ

表1 11名の遍路体験の概要

NO	年齢 <sup>*</sup>	性別	職業	打ち方	遍路体験
1	23	男性	アルバイト	通し	大学時代、北海道や東北を野宿や登山をしながらバイクで旅した。卒業後、石鎚山登山を目的に四国の旅に出た。遍路の予備知識はほとんどなかったが、道行く人に接待を受けたり合掌されたりするうちに「発心」。杖、白衣、納札を順次買い揃えていき、阿波最後の寺では納経も始めた。「野宿派」との交流のなかで地蔵に手を合わせるなど信仰心も芽生えた。石鎚山登山後モチベーションが下がったが、気を引き締めなおし結願した。
2	27	男性	無職	通し (3巡目)	18歳のときバイクで、26歳のとき車でまわった。今回は野宿しながら八十八カ所と別格の百八カ所を含め、できるだけ多くの寺を打ちながら歩いている。遍路を歩いてよかったことは、人と出会えること、自分を見つめ直すことができること、感謝の気持ちがわくことだという。「感謝というのは満足感とは違う。もしこの人、この物がなかったらそれによって何かを得られなかった、すごい嬉しい、良かったという気持ち、それを感謝だと思う。だから一人ひとりとの出会いがすごく感謝なんです」
3	29	男性	アルバイト	通し	冒険家の手記を読み徒歩で日本中を旅したが、遍路では山の上のお寺や納経などの決まりがあるため2日目にして自信をなくした。「白衣も着ていない怪しい偽遍路みたいなのに百円とか十円、見ず知らずの人たちからいただくのは感動。いつの間にかお遍路に巻き込まれ、お遍路であることがすごく重くなっていった」。自然の偉大さ、人間の無力さ、努力の大切さ、現地の人とのふれあい、弘法大師と同じ体験することに遍路の有り難さを感じた。
4	41	男性	無職 (元会社員)	通し	上司と喧嘩し商社を辞めた。退職後車で遍路をまわり、雇用保険が切れた後、番外、別格、奥の院も含めできるだけ多く寺をまわっている。遍路1日目、食堂で「足が痛いんだったらお大師さんに治してもらうから」と拜んでくれた。「左の肩が痛いじゃ。この2、3年で男の子を亡くしてらんか」と言われた。そのとおりで涙が出た。足にマメができて毎日やめたいと思っている。お接待されたり拜まれたりと人の優しさがしみじみと嬉しい。
5	45	男性	僧侶	通し	44歳で実家の寺を継いだ翌年、真言宗の開祖・大師の足跡を巡りたいと遍路に出た。阿波～土佐は慣れない衣体と荷の重さで疲労し、坂道を走って下って足を痛めた。土佐終盤から足の痛みがなくなり、同行の遍路者に目をやる余裕が出てきた。接待を受けたり、立ち話したり、家に招かれたり地元住民と交流しながら歩いた。特に印象的だったのは、職業遍路や殺めた人の供養で歩く人、ダウン症の青年など。遍路という土地の有り難さを実感した。
6	50	男性	早期退職 (元会社員)	通し	23歳のとき勤務中、手に障害を負った。疲労しやすく、また家族のためばかりではない人生を送りたいと50歳で早期退職。2ヵ月かけて旅支度し遍路に出た。歩くうち「自分も役に立ちたい。受けた分、返していきたい」と思うように。結願後「お四国病患者」になり、「自然の中を歩くこと、人との出会い、人の優しさを求めて」再度遍路を歩いた。2巡目は景色を見たり遍路道の草刈りをしながら歩いた。その後も全国各地の札所巡りを続ける。
7	54	男性	会社員	区切り	対人関係などストレスの多い仕事のかたわら、春秋に区切り打ちでまわり3年で結願。接待の車と電車を利用したことが心残りでも完全歩きを目指し2巡目に挑戦。1巡目は歩くのに夢中だったが、2巡目は景色を見る余裕ができ、また亡くなった人の夢をよく見る。印象的なのは女性や高齢者からの接待、小中学生からの挨拶。遍路を歩き視野が広がり、顧客、部下、友人など人を見る目が変わり、相手の気持ちを考えるもの言うようになった。どんな苦しみも打ち克つという自信もできた。
8	57	男性	早期退職 (元小学校教諭)	通し	ストレス等から定年前に退職。その数年前から遍路に憧れを抱く。「親不孝の償いの意味での母と父との3人旅、次の人生への一種の入試のような気持ちもあった。人とは極力交わらず、俳句・短歌を詠みながらひとりで歩く。土佐で激しいホームシックにかかり、17～18日目に歩くのをやめ帰宅しようとするが、地元の人の道案内等偶然の出来事が重なり歩き続けることに。その後もホームシックはやまず早く帰りたい一心で先へを急いだ。
9	62	男性	定年退職 (元会社員)	通し	会社では経理職を務めていた。退職前から遍路の準備を開始。歩きの練習をし(退職後は1日1万5千歩歩いた)、靴も履き慣らし、ガイドブックを参考に50日間の旅程を組み、宿泊先の予約を済ませて遍路に出た。宿坊以外では晩酌をたしなみ、旅程どおり歩いた。31日目に疲労や不整脈を感じたが、適度な水分補給、温泉での休息、宿坊の精進料理で数日間で快復。たいていの遍路者が悩む足の痛みも全く経験しないまま結願した。
10	64	女性	無職	区切り (3巡目)	50歳のとき夫とバイクと自転車、59～60歳のときに徒歩で結願。63歳から一人で区切り・逆打ちで歩いている。逆打ちするのは大変な分、功德が多いのと、お大師さんに会えるという謂われがあるから。他の遍路者に出会えるのが面白い。宗教心はないと断言するが、遍路道では鳥肌が立って、金縛りに遭ったことがある。「長い歴史のなかでそこに埋もれた人が呼んでるのかな。自然の摩訶不思議、人間の力でどうこうじゃないものを歩いて感じる」。
11	66	男性	定年退職 (元会社員)	区切り	若い頃は鬼とよばれるほど厳しかったが、母親のある言葉がきっかけで45歳以降変化。部下や妻への態度が変わり、花を愛でるようになった。紫陽花を見に行った寺が関西花の寺二十五カ所だったことから札所に興味をもった。定年後の生活は生かされてきた「御札参り」の遍路とボランティア活動。妻と車で2巡、歩き+乗り物で1巡した後も歩き続け、先達の資格も得た。「最高の人生歩いているなあって思う。みんなに喜ばれながらね」。

\*遍路を歩いたときの年齢。

と不思議さ、人間の無力さ、大師と同じ体験ができる有り難さ、遍路の有り難さなど多岐にわたっていた。11名の事例のうち、事例1と事例5の遍路体験を詳しく記述する。

(1) 事例1

中澤さん(仮名、23歳)は大学時代、野宿や登山をしながら北海道や東北をバイクでツーリングした。卒業後間もなく、石鎚山登山を目的に登山用装備で四国の旅に出た。遍路に対する知識はほとんどもたず、一番札所で「記念スタンプないですか」と尋ねた。納経(寺院をお参りした証に寺院からいただく朱印と墨書)はせず、白衣も杖も買わなかった。2日目、道で擦れ違ったおばあさんが手を合わせた。「ええっ、ひょっとしてぼくを拝んだんのか。ぼく普通の格好してんのにて思って。そこでちょっと<sup>ほっしん</sup>発心」。3日目には別のおばあさんが千円札を差し出した。

「ぼく『いいです』ってめっちゃ断ってん。でも『断っちゃいけません』て。『浄財にでもします』言うたら怒られてね。『あなたが金持ちかなんか知らんけど、あなたのために使いなさい』って。苦笑しながらもろた」

接待を受けたら御札に<sup>おさめふだ</sup>納札を渡すことも知らなかった。「信心ないですから言うまくってたんですけど、だんだん恥ずかしくなってきた」、十九番札所で白衣と杖を購入したところ、「これ持ってたらいいことあるよ」と錦札をくれた。納札は寺をお参りする際、本堂と大師堂に納めるお札だが、接待を受けたときも御札として渡す。もらった人はお守りとして家の壁などに貼ったりお財布に入れたりするが、とりわけ50回以上の方がもつ金札や百回以上の方が持つ錦札は御利益があると重宝される。その夜、神社で野宿しているとお参りに来た善根宿(住民が無償で提供する宿)の人に声をかけられ、1日休憩させてもらった。出発前にお祈りもしてくれた。「錦札のおかげやって思えてきて、そこでまた発心」。御札に十九番札所でもらった錦札を置いてきた。二十番札所で納札を購入した。

「お接待はすごい習慣やと思いましたね。普通に歩いてる人、知らん人にくれるんですよ。別に金持ちの人がくれるわけじゃないでしょ。ひょっとして貧乏かもしれんのに。何もらっても涙目になった。最後まで慣れなかったです。お札で返すのでも足りひんと思いました。だからせめてところを込めて住所と名前書くことにしました」

阿波最後の二十三番札所では納経を始めた。金剛杖が汚れてくるのを見てこれが自分の道具に対する態度だと気づいた。以来、休憩時は先に休ませ、雨の日はビニールをかけ、何かに打ちつけたら「ごめんなさい」と謝るなど大切に扱った。

「最初は信仰心なしな思ってた。白装束も、こんな恥ずかしい格好、誰がするねんねて思てました。でも徳島で挫折しました。どうせやるんならちゃんとしよう」と

20日目、40歳代ぐらいの男性と出会った。男性は「遍路は生活だ。歩かな食えん」と言い残し、笑いながら立ち去った。その夜、寺の軒先のベンチで野宿しているとき雨で目が覚め、これまで出会った3名のいわゆる職業遍路を思い出し、吐いた。

「どういう生活してんのやろてシュミレーションしてみたんです。親もいない、家もない、この生活が毎日続くんやったらどうなんやろて。ぼく野宿やから気持ちわかるんです」

中澤さんは歩き遍路を「宿派」「野宿派」「托鉢派」に区別していた。土佐では後述の弘有さんら数人の「宿派」と同行になった。しかし禁欲的に歩く中澤さんにとって「宿派」といっしょにいるのはつらいことだった。伊予に入る前、ペースダウンし離れた。追いつこうと無理をしたり、追い抜かれて自分の足の遅さを感じたりと、ペースを乱されるのも離れた理由だった。野宿では、月明かりや蛍、夜の雨、トイレや墓の水を炊飯に使うなど野宿ならではの特別な空間や手間を楽しんだ。伊予で、遍路2巡目の55歳の男性といっしょに野宿した。男性は1日千円以下で過ごし、通夜堂(遍路者が宿泊できるお寺のお堂)にも泊まらず、名も名乗らず、写真も撮らせなかった。1巡目は宗教の本を読んで知識でまわったが、2巡目は地図さえ持たず、お地蔵さんに手を合わせている方がよほど信仰心が芽生えると語った。中澤さんもいつの間にか地蔵に手を合わせるようになった。「山のなかの遍路道とか登ると地蔵さんを置いてくれてるじゃないですか。人が運んできたわけでしょ。その気持ちに手を合わそうかなあ」と。「バス遍路」については、人それぞれ事情があるだろうし、信仰心があればバスもまわっても構わないと思っていた。しかし境内で唾を吐いたり、ゴミを捨てたり、煙草を吸っている人などがいて「すごいムカついて」気持ちが変わった。また、添乗員が代わりに納経しているのを見て、札所と札所の間を歩いて

いるときの体験の方が大事なのではないかと思うようになった。

40日目、石鎚山に登頂し、「雲が手に届きそうな」展望台に張ったテントで一夜を過ごし、朝日を仰いだ。下山するときグッとこみあげるものがあった。

「ここまで来られて良かったなあって。やっぱり石鎚山は大物やったし全身全霊使った。ここで完結し、翌日以降は義務的にまわりました。もう遍路じゃないって思って」

中澤さんにとって遍路は楽しいものではなかった。遍路を出る前、受動態になってどんな人とも話をしようと決めていたが、地元の人と話す内容は戦争や家族の問題など重い話で、楽しいのは一瞬だった。野宿しながら歩くうち、バイク、食事、友だちなどすべての欲が消えていった。腹が立つような出来事があったとしても、歩いて寝たら忘れた。

石鎚山下山後、早く帰りたい一心でペースが上がったが、あるとき地図を見て結願に近いことに気づきペースを落とした。結願後、一番札所へ向かう途中、真っ白な装束をつけた歩き始めたばかりの遍路者たちと擦れ違い、「おれ終わってんでー」という気分になったが、「えらそうに思ってたらかんわ。別に高尚なわけじゃないやんけ」と自分を戒めた。一番札所に戻りここがゴールだと感じた。遍路最後の寺なのでこころ込めてお参りした。

## (2) 事例5

弘有さん(仮名、45歳)は地方都市の真言宗の寺院の長男。大学卒業後、本山で修行し得度したが、故郷にUターン後は障害者施設で働いた。父の後を継いで住職となったのは44歳のときだった。住職になった翌年、「真言宗の僧侶としての末席を汚したという思いがあつたから、真言宗を開いた大師の足跡を絶対巡って見ないといかん」と遍路に出た。といっても準備らしい準備はしなかった。出発直前に読んだ遍路の本に歩きの練習をするようにと書いてあり、歩き通せるだろうかと体力的な不安を感じた。

縵浄衣、手っ甲、脚絆、地下足袋、菅笠、金剛杖と、完璧な衣体えたいを着け出発した。新幹線や在来線を乗り継いで一番札所に向かう途中、高松駅で「おうどん代に」と女性から小銭の接待を受けた。合掌し「南無大師遍照金剛」と唱え受け取った。遍路を巡ってもいないのにという気恥ずかしさと驚き、そして幸先の良さを感じた。

衣体を着けると気が引き締まったが歩きづらかった。ザックが固定せず左へ右へ傾き、杖はつきにくく、足袋擦れができた。荷物を精選してこなかったため、ザックが肩に食い込んだ。「お大師さんを背負って歩きよるんだ。大師の重みなんや」と言い聞かせ歩いた。

11日目、2人のいわゆる職業遍路に会った。家財道具を詰め込んだ老人カーを引いた73歳の女性は、60歳ぐらいから遍路を歩き続けていた。好きな道を好きなルートで50回以上巡り、「歳だから山の上の寺には登れないけど下から手を合わせている」と語った。年金はなく托鉢こつじきが生きる術だった。40歳代ぐらいの男性は、3～4年遍路を歩き続けていた。

「東京とか大阪のような都会であれば住所不定無職の人と同じかもしれない。でもあの人たちには遍路をしているんだというプライドがあった。それはそれですごいなと思った。乞食遍路とか言う人もいるけど、ほんならおまえらまわったことあるんかいって言いたい」

こうした遍路者をも受け容れる四国という土地の有り難さを感じた。16日目、二十七番札所を打ったあと、他の遍路者に追いつこうと、背中の荷物に押されるようになだらかなアスファルトの坂道を調子よく駆け下りた。が、それが原因で右足の筋を痛めた。痛みは日増しにひどくなった。立ち止まるとたんジンジン痛み、歩き始めるとさらに痛んだ。歩いている方がむしろ楽だった。しかしどんなに足が痛くても立ち止まって接待を受け、立ち話をし、「お茶でもどうぞ」と誘われると家に上がった。

早期退職者、若き修行僧、週末に区切り打ちでまわる40歳代の大阪の会社員、足の速い60歳代の男性、そして登山目的で遍路に来た中澤さん等々、足を痛め歩きがゆっくりな分、年齢も動機も歩き方も異なるさまざまな遍路者と同行になった。とりわけ強烈だったのは土佐最後の遍路宿で同宿した40歳代の男性だった。男性は元暴力団員。殺人罪で6年半刑に服し20日前に出所したばかりだった。獄中読んだ本で大師の教えに辿り着き、犯した罪を悔い、僧侶になりたいと語った。仏教や僧侶になる方法について矢継ぎ早に質問が飛んだ。寝る前と起床後、壁に向かって一心に拝み、白衣もつけず杖も持たず宿を後にした。2日かかるところを1日で刻んでおり、彼と会ったのはその1度きりだった。

「肉親を亡くして供養のために遍路に出られる方は結構おられる。でも人を殺めて、その人の供養のためにまわ

る人もいるとは。一問一答がほんとにいい経験をさせてもらった」

足の痛みは次第に和らいでいった。35日目、松山市内を歩く頃には完全に癒え、1日35キロ前後の距離を無理なく歩けるようになった。身長170センチで70キロあった体重は63キロにまで絞られ、髭や髪もすっかり伸びた。

40日目、いつもは通り過ぎる別格の寺でお参りしていると、親子とおぼしき中年の女性と20歳ぐらいのダウン症の青年と出くわした。青年は大師堂で目を閉じて合掌し、目を開くと右手を挙げ「お大師さん、こんにちは」と挨拶し、般若心経をあげた。弘有さんは、友だちにするかのように大師に挨拶する青年の自然体、それを見守る女性、たどたどしい般若心経を有難く感じた。

47日目に結願したが感動は湧かなかった。49日目に一番札所に戻ったがやはり感動はなかった。<sup>どうぎょうにん</sup>同行二人(遍路者は弘法大師と2人で歩いているという意味)で歩いてきたつもりだったが、信心が足りないのではないかと自分に問うた。50日目、御礼参りのため高野山に登った。駅に着き、歩いて奥の院に向かう途中、虚空から「よう来たな」と呼びかけられた。否、身体のどこかに感じたというべきか。すぐにお大師さんだとわかった。「ああ来て良かった。ちゃんと呼ばれたんだ。最後にちゃんとおれのところに来て言ってくれたんだ」と熱いものが込み上げ、初めて結願の感動を味わった。奥の院でお勤めし、結願の御礼を言い、やっと真言宗の末徒としての勤めを果たせた気がした。帰宅途中、駅や車内で人々の視線を感じた。無理もなかった。縲浄衣は擦り切れ、千切れ、すえた汗の臭いがしみつき、髭も髪も伸び放題だった。しかしこの姿こそが遍路を歩き通した証だと、弘有さんは見られるほどに自分が誇らしく思えた。

## 2. 事例の遍路者の体験過程

### (1) 事例1

中澤さんは、歩き始めた当初、道行く人からの接待や合掌に戸惑いを覚えた。石鎚山登山が目的で遍路者としての意識が全くなかったからである。しかしほどなく「発心」が高まり「ちゃんとしよう」と心境に変化が生まれる。道行く人々からの接待・合掌行為が、旅人の彼を遍路の枠組みに引き入れていったといえる。自分は接待を受けるに値しないという戸惑いと接待の習慣、接待者への感嘆の間で葛藤しつつ、それに対する返礼として彼が選んだのは、やはり遍路の枠組みにおける表現方法であった。すなわち、白衣をつけ、杖をつき、接待に対して納札でお返しし、納経を始めるという。直接的には納札を渡すという方法で、間接的には接待されるに相応しい態度を身につけることで御礼の気持ちを表現した。旅人から遍路者への自己意識の変化がそこにはみとれる。

接待のほか、もうひとつ遍路者としての自覚を高めるきっかけを与えたのは、他の遍路者たち——「バス遍路」、「宿派」・「野宿派」・「托鉢派」・新人の歩き遍路——であった。「宿派」からは逆説的に禁欲が、「バス遍路」からはマナー意識や納経することの意味への思索が、「野宿派」からは禁欲や信仰心が、「托鉢派」からは生きる糧として歩く遍路者の厳しさや自分のおかれた環境への気づきが、新人の遍路者からは謙虚な態度が促された。自分には家もあり親もいるからこそ野宿の瞬間を楽しめることに気づかされ、山中に佇む地藏に手を合わせ、納経することよりも遍路を歩くことの方が大切であると思ひ、マナーの悪い遍路者に怒りを覚え、結願しても謙虚であらねばと自分を戒めたのである。

以上のように、中澤さんはそれまでの旅と同様、旅人として歩き始めたが、道行く人々の接待行為等により、遍路を歩く自分＝遍路者として見られていることに気づき、自ら遍路の枠組みに身を置き、遍路に相応しい態度を身につけていった。一方で石鎚山登山後、しばらく虚脱感に陥ったことから旅人としての自己意識が完全には消え去ってはいなかったことがわかるが、最終的には一遍路者として遍路を全うした。

### (2) 事例5

僧侶の弘有さんは完璧な装束で遍路者として歩き始めた。日常的にお布施に接していることから接待も自然に受け容れた。接待により喚起されたのは、中澤さんが抱いたような負債感なき、純粹なる有り難さという感情であった。乞食遍路、人を殺めた人をも受け容れる遍路という土地に対しても有り難さを感じた。しかし一方で、当初から疲労感や足の痛みを抱え、歩くのに精一杯という日々が続いた。

弘有さんは接待されると宗教的作法で返礼したが、それ以前に返礼していたといってもよい。足を痛めていた

弘有さんにとって、立ち止まって接待を受け、話しかけに応え、家に招かれることは苦痛を伴うものであり、「勤行」だったからである。接待者の立場で考えるとわかりやすい。弘有さんは衣体を着けていたのでひと目で修行僧とわかった。遍路ではお遍路さん=お大師さんであり、遍路者に接待することは大師に接待することと同等の意味をもつとされる。修行僧に接待することはより有り難いことであるに違いない。

弘有さんは、阿波～土佐では疲労や足の痛みで歩くことに精一杯であったが、体力がつき、足の痛みが和らぐにつれ1日に歩ける距離も伸びていった。それに伴い同行の遍路者の歩きや自然に目をやる余裕が出てきた。ダウン症の親子連れが参拝する様子に感動したのは、心身ともに充実していた時期であった。一方で、八十八番札所でも、また一番札所に戻ってからも結願の感動は湧かず、信心が足りないのではないかと自分に問いかけた。しかし御礼参りした高野山で大師の「声を聴き」、深い感動を味わった。遍路を歩き終えた誇り、遍路を終える淋しさを胸に家路に着いた。

以上のように弘有さんは修行という目的意識・態度、仏教の十分な知識と技法、遍路者としての明白な自己意識をもって遍路に入った。にもかかわらず、足の痛み、疲労、荷物の重さ、慣れない衣体のため、余裕をもって歩けるようになるまでに相応の時間を要した。遍路においては身体もまた重要な要素であることがわかる。苦しい時期に彼の支えとなったのは、同行二人、接待、他の遍路者たちであった。体力がつき、足の痛みが癒え、心技体揃うとまわりに目が向くようになり、霊的体験をして結願した喜び、真言宗の僧侶としての務めを果たした安堵感、遍路者としての誇りを味わい遍路を全うした。

### 3. 遍路の構造と意味空間

前述のように、筆者は遍路による心理的・社会的・身体的効果を生む主な背景要因として9つの要因をあげた(福島、2004)。これらの背景要因は3つのカテゴリーに分けて整理することができる。(1) 遍路および四国の空間構造、遍路者をとりまく物理的要因といった外面的構造。地形地理・自然、札所、装束・持ち物がこれにあたる。(2) 遍路者および地元住民の間で一般に共有されている認識・信念・態度・行動といった内面的構造。霊場、大師信仰、お接待、作法・ルール、日常と非日常の交錯が該当する。(3) 外面的・内面的構造のなかで遍路者に意味づけされる、遍路者にとっての意味空間。受容的空間、修養的空間、自由で護られた空間、外界とのつながりを維持・強化する空間があげられる。以上のカテゴリーに即して遍路に影響を与える要因について改めて考えてみたい。

#### (1) 遍路の外面的構造

- ①地形地理・自然：遍路は巡霊地のなかでも珍しく四国という島の中に位置する。全行程約1200キロに及ぶ八十八ヶ寺のルート沿いに都市部はわずかしかなく、遍路者は結願するまでの1～2ヶ月間のほとんどを山、川、海、田畑などの自然に囲まれて過ごす。
- ②札所：遍路には八十八ヶ寺の札所、さらには奥の院や番外札所がある。札所などを一つひとつ打ちながらまわるため、歩くルートはおおよそ決まっている。島という地形のため、順に(あるいは逆に)札所を打っていけば結願するのはもちろんのこと、打ち始めの寺に近づいていき、いつかは打ち始めの寺に戻る空間構造となっている。
- ③装束・持ち物：遍路では、修行僧でなくとも白衣、菅笠、装束、金剛杖、頭陀袋といった独特の装束・持ち物を身につけて歩く。

#### (2) 遍路の内面的構造

- ①霊場(巡礼地)：四国は真言宗を開いた弘法大師空海が生まれ育ち修行した霊場である。
- ②大師信仰：上記のことから四国には大師にまつわる謂われが語り継がれ、大師信仰が現代に根付いている。「お遍路さんはお大師さん」とみなされるのも大師信仰にもとづく。
- ③接待：遍路者に対して個人または講による物品や金銭、無料の宿の提供などの接待が日常的に行われている。また、事例にも出てきたように、遍路者に対して道行く人が手を合わせたり励ましの言葉をかけることも珍しくない。
- ④作法・ルール：遍路には昔ながらのお参りや装束・持ち物に関し宗教的・慣習的な作法、ルールが受け継がれている。札所を打ちながらまわるため、山の登り下りも含めある程度決められたルートを歩かなければならな

い。納経するには7時から17時の納経時間内にお参りしなければならない。先を急いでいようとも寺院では本堂と大師堂でお勤めをする。宿に入ったら疲れていようとも金剛杖を先を洗い先に休ませるなどである。接待という名の援助にも一般的な援助とは異なる暗黙のルールや意識がある。「車の接待以外接待は断つてはいけない」、接待を受けたら納札で返礼するというルールであり、接待者はお遍路さんに接待することはお大師さんに接待することとみなしている。

- ⑤日常と非日常の交錯：上記のように遍路は霊場であるが、とはいっても人里離れた山中に籠もるわけではない。遍路者が歩く道の多くは、車道や路地、住宅地、畦道など生活感や人の気配のある場所である。山の中にいてさえ、民家、地蔵やお供え物から生活者の臭いを感じる。住民にとっての生活の場がすなわち遍路者にとって巡礼の場という、日常と非日常が交錯する構造を成している。

### (3) 遍路者にとっての意味空間

- ①受容的空間：霊場、大師信仰、接待といった内面的構造により、遍路を巡る動機、年齢、性別、職業、信仰する宗教、国籍を問わず、一介の遍路者として受け容れられる。かつて病氣など何らかの事情で故郷を追われた人が遍路を歩いていたのはこのためである。また余談だが、最近、テレビのドキュメンタリー番組で紹介された遍路者が実は指名手配者で、番組放映がきっかけで逮捕されたという珍事件もあった。
- ②修養的空間：遍路は霊場であり、必要最小限の荷だけ携えひたすら歩いて札所を打つ生活を送る。四国の自然のなかを歩くことで身体が鍛えられ、決められた作法・ルールを護ることで自分を律する。装束・持ち物が自己を振り返る契機ともなる。このように外面的・内面的構造のなか、遍路者は心身を律し生活を正す。遍路とは修養空間である。
- ③自由で護られた空間：島という地形、札所の存在は、次の札所を目指して歩けば元来た場所に近づいていき、いつか円としてつながるという安心感を与える。豊かな自然、そこに住む人々の接待や眼差し、ともに修養に励む同行の遍路者の存在は、遍路者を慰め、励まし、護る。住民として護られている。生活の場に絶えず外部者が進入してくるわけだが、独特の装束・持ち物ゆえ遠目でも遍路者とわかり警戒心は抱かない。遍路姿は風景の一部と化し見る人に季節感さえ与える（遍路は春の季語である）。接待は断つてはいけないというルールがあるため、遍路者の気持ちを深読みしたり断られるのではないかといった不安は不要である。接待を受ける資格がない、申し訳ないといった遍路者の負債感をも軽減する。遍路には作法やルールがある一方で自由も包含する。完全歩きか乗り物を併用するか、どんな乗り物を使うか、宿に泊まるか野宿するか托鉢するか、車道を歩くか山道に行くか、1日何キロ歩くかなど、遍路を巡る手段、歩きの形態、ルート、日数は目的や体調などに合わせ自由に選択できる。以上のように、遍路は、その外面的・内面的構造ゆえ護られた空間でありながら、自由をも包含した空間である。
- ④外界とのつながりを維持・強化する空間：遍路は人気の高い霊場であり、ほとんど常に他の遍路者の存在を感じながら、あるいは交流しながら歩く。住民の生活の場を接待を受けながら歩くから、霊場という非日常の場に身をおきながら日常の世界と切り離されることはない。人っ子ひとりいない山深い遍路道を歩いている、そこが遍路道であることを示す道標や札、遍路者がつけた足跡や杖跡から人の気配・配慮を感じ取る。そして何より遍路者は大師と同行二人である。結願するには1200キロを自分の足で歩き通すしかないという厳しい修養のなかにも、同行の遍路者、地元住民、風景、そして大師など外界とつながっており、決して孤独ではない。否、修養を行う身ゆえ、つながりをいつも以上に敏感に感じ取り、感謝の念を抱く。

## 4. 遍路の意味空間における体験過程

11名の事例だけからもわかるとおり、遍路体験は個性が高い。しかしそうした多様な体験のなかからもある程度一般的なプロセスをとらえることが可能である。本稿では遍路での体験過程を、遍路の意味空間との関連において導入・準備期、不安・試行期、葛藤・危機期、自己探求・安定期、統合期、移行期の6段階に分けて考察する（表2参照）。

### (1) 導入・準備期

厳しい地形地理・自然（外面的構造）ゆえ、霊場という未知なる世界（意味空間）ゆえ、大部分の人は程度の



差こそあれ相応の動機をもち遍路に発つ。出発にあたっては情報収集したり、持ち物を揃えたり、歩きの練習をして臨む。したがって遍路に入る前の段階として導入・準備期が存在する。

(2) 不安・試行期

初めて遍路を歩く場合——事例5のようにたとえ修行僧とて——身体的・心理的な不安を抱えながらの出発となる。日常とは異なる内面的構造のなか、見様見真似、試行錯誤で参拝作法、ルートや宿の取り方、宿での過ごし方などを体得し、遍路に慣れていく。歩きのペースやリズムも同様である。

表2 遍路における体験過程

おおよその時期・場所	出発前	阿波 (発心の道場)	土佐 (修行の道場)	伊予 (菩提の道場)	讃岐 (涅槃の道場)	帰宅後
体験過程	導入・準備期	不安・試行期	葛藤・危機期	自己探求・安定期	統合期	移行期
課題	旅立つこと	遍路構造への馴化	歩き続けること	自分らしくあること	遍路の総まとめ、意味づけ	日常への回帰
重要な存在	ソーシャルネットワーク 遍路経験者	← 自己 同行の遍路者 地元住民 大師 →				ソーシャルネットワーク
体験例	・遍路への動機づけ ・手記、ガイドブック などを読む ・装備、携帯品準備 ・歩きの練習 ・旅程を組む	・携帯品購入 ・参拝作法 ・接待の受け方 ・体力的不安 ・荷物の重さ ・不要な荷物を送り 返す ・ルートの取り方 ・歩きのペース、リズム	・足のマメ、筋肉痛 ・肩の痛み ・疲労 ・ひとりで歩く不安 ・接待への感動 ・接待への負債感や 抵抗感 ・遍路者意識	・遍路の身体になる (体力・体重) ・自分らしい歩きの 追求 ・ひとりで歩きたい ・人生の振り返り	・遍路の過ごし方 ・結願への期待 ・名残惜しさ ・感謝の念とお返し ・遍路後の生き方の 模索 ・至高体験 ・結願の感動 ・達成感	・遍路への渴望 ・足の痛み ・疲労感 ・身体の不ふふわ した感じ

(3) 葛藤・危機期

不安・試行期と重なるように訪れるのが葛藤・危機期である。荷の重さに喘ぎ、阿波では山、土佐では距離の長さに阻まれ、足を痛めたり体調を崩す人もいる。次の札所へ辿り着くのに精一杯で、まわりの遍路者や風景に目をやる余裕はない。ホームシックにかかる人もいる。このようにさまざまな困難を経験し、遍路を断念する危険性をも秘めたこの時期は葛藤・危機期とよぶことができる。

不安・試行期～葛藤・危機期において、困難に耐え、あるいは乗り越える助けとなるのが遍路の外面的・内面的構造、意味空間である。地元住民からの接待や声かけに和み、励まされ、そばを歩く同行の存在を同志としてこころ強く感じる。ホームシックにかかった事例8では、地元の人からの道案内がきっかけで歩き続けることになった。自己意識と周囲の目にギャップをおぼえ葛藤する人もいる。当初、遍路者としての意識は、完全なる旅人意識(事例1・3)から、観光半分・参拝半分という意識、そして完全なる遍路者意識(事例5)まで個人差が大きい(図1)。しかし旅人としての意識が強い人であろうと、歩くうちに遍路者意識が高まり、完全なる遍路者意識に近づいていく。事例1、事例3では、住民からのお遍路さん(=お大師さん)として自分に注がれる行為や眼差しに、自らを遍路者として意識せざるを得えず、「いつの間にかお遍路に巻き込まれ、お遍路であることがすごく重くなって」いった。では遍路者意識で歩き始めれば一人前の遍路者になれるかということもそうともいえない。宗教や遍路の知識・技法が不十分であったり、事例5のように十分な遍路者意識や宗教的知識・技法をもちあわせていても身体が出来ていなかったりする。遍路の意味空間に身を置くなかで心技体揃った遍路者となっていくのである。

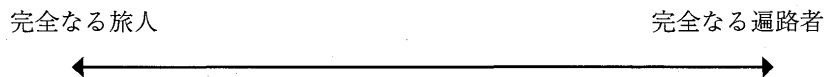


図1 遍路者の自己意識

#### (4) 自己探求・安定期

徳島、高知を経て愛媛に入る前後になると遍路者らしい身体が出来てくる。参拝作法、お接待、歩き方、ルートや宿の取り方など遍路での慣習にも慣れ、精神的に余裕が出てくる。ひとりで黙々と歩きたい、自分のペースで歩きたいなど、自分らしい歩き方を追求したくなる。他の遍路者を客観的に眺めたり、まわりの自然に目をやるゆとりも出てくる。このように心身共に安定しひとりでいることができるようになるこの時期は、自己探求・安定期とよぶことができる。この時期には行動規範や道徳意識にも敏感になる。接待、歩き遍路としての誇り、遍路への愛着に起因しているのではないかと考えられる。心身が安定したこの時期は、長い距離を歩けるようになる。外面的・内面的構造もそれを促す。山の多かった阿波、札所間の距離が長かった土佐に比べ、伊予以降はテンポよく札所を打てる。接待など周囲の行為に思いを馳せるなど生かされていると感じ、世話になった分お返しをしたい、自分も人のために役立ちたいなどと思うようになる。

#### (5) 統合期

讃岐は札所の数こそ23と全体の約4分の1を占めるが、距離は他県に比べ格段に短い。結願はまだ先だと思っていたのにいつの間にか結願が近いことに気づく。結願間近になると淋しさを感じ、ゆっくり歩こう、札所を丁寧にお参りしよう、自然を味わいながら歩こう、より謙虚であろうなど各遍路者が自分なりのまとめに入る。また、今後どう生きていくか、遍路経験をどう生かしていくかなど遍路の意味づけをする。このように結願の総まとめ、遍路の意味づけ、人生の模索をするこの時期は統合期とよぶことができる。

#### (6) 移行期

遍路を歩く動機が人それぞれであったように、遍路を去り自宅に戻ったあとは再びさまざまなその後を辿る。ただしすぐに日常に戻るわけではない。遍路直後は、頭がぼーっとする、足が痛い、寝ても覚めても遍路のことが頭に浮かぶ、また歩きたいと思う、車を運転中歩道を歩く人に目がいく等々、遍路の影響を相当引きずる。非日常と日常の境界にいることから移行期とよぶことができる。移行期を過ぎると主に3つのタイプに分かれていく。①元の仕事や生活をするなり仕事を探すなりして日常に戻っていき、遍路が思い出となっていく。②寝ても覚めても遍路のことばかり考え、再び遍路を歩いたりする「お四国病」に陥る。③遍路との関わりをますます強めていき、先達になるなどなかば職業にする。

### まとめと今後の課題

本稿では、歩き遍路の事例を交えながら、遍路の構造と意味空間、体験過程について検討を行った。互いに関連し合う外面的・内面的構造において、遍路は遍路者にとって受容的・修養的で、自由で護られた、外界とのつながりを維持・強化する独特の意味空間を成している。そうした構造や意味空間のなか、遍路者は導入・準備期、不安・試行期、葛藤・危機期、自己探求期・安定期、統合期、移行期という体験過程を経ると考えられる。

ここで2点、付け加えておきたい。1つは、遍路の外面的・内面的構造、意味空間、遍路者の体験過程は相互に関連し合っており、遍路の構造のみならず遍路者の体験そのものも遍路の空間を意味づけている点である。たとえば四国は弘法大師空海の生まれ故郷、修行の地であり、四国の自然は人々に修行の舞台を提供し、昔ながらの作法やルールが存在する。遍路者はこうした外面的・内面的構造、霊場・修養の場という意味空間のなかを歩くなかさまさまざまな体験をするわけであるが、遍路者が体験そのものが遍路を霊場、修養の場であり続けさせる。そしてもうひとつは、遍路者は遍路の構造や意味空間において一連の体験過程を経るが、そのなかでそれぞれが自分独自の遍路の世界観、コスモロジーを形成するという点である。たとえば事例5では遍路とは有難い世界である、事例10では遍路は宗教を超えた大いなる存在が棲む世界というコスモロジーがみてとれた。

本稿をもとに今後は以下の点についてさらなる検討を行っていききたい。①遍路では大師信仰および独特の作法・ルールのもと接待が行われる。遍路者は接待をきっかけに遍路者としての自己意識を高め、また感謝の念が生じ、接待者のみならず一般他者および社会に対し何らかの形でお返しをしたいという気持ちを抱くに至る。したがって日常受ける援助、それにより生起される感謝の念とはダイナミクスや質が異なる可能性がある。遍路における感謝の念の生起およびその質について検討を行いたい。②遍路者に対するフォローアップを続け、感謝の念が日常どのような形で表現され、あるいは変化していくのかなど、遍路における体験過程がどのような長期的影響を

与えるのか明らかにしていきたい。③本稿では質的データによる検討を行ったが、遍路を歩く前後における質問紙調査などにより、量的データをもとに意味空間と体験過程の関連について検討を行いたい。

### 謝辞

本研究にあたって共に歩き、あるいはインタビューや参与観察にご協力いただいたお遍路さんたちにこころより感謝申し上げます。本研究は2004～2006年度科学研究費補助金（基盤研究C 課題番号16530406）を受けて行った研究の一部である、使用したデータは2001～2004年に収集したものである。

### 文献

- 福島明子 2003 高千穂夜神楽の健康心理学的研究——神と人のヘルスケア・システム 風間書房  
福島明子 2004 大師の懐を歩く——それぞれの遍路物語 風間書房  
前田卓 1966 四国遍路の社会学的研究 密教文化、96-137  
前田卓 1971 巡礼の社会学——西国巡礼・四国巡礼 ミネルヴァ書房  
佐藤久光 1990 四国遍路の社会学的考察（上） 密教学、26、29-47

(2006年12月1日受理)